

SONRISA

# そんりさ

vol. 165



## 闘う女性たちの集会

闘う女性たちの集会の開会式（チアパス州カラコル・モレリア）

- |    |                                            |            |
|----|--------------------------------------------|------------|
| 02 | 闘う女性たちの集会—2018年春のサパティスタ運動から                | ……角 智春     |
| 06 | メキシコ麻薬戦争の真実—行方不明の家族を探す人々& インスタレーション「記憶の足跡」 | ……山本 昭代    |
| 08 | ニカラグアの政治危機<br>—退陣を要求する民衆、弾圧に対するオルテガ政権      | ……新川志保子    |
| 11 | 「生活改善」でムラ再生 コスタリカ                          | ……藤井 満     |
| 14 | ラ米百景 トラテロルコ事件 50周年、勝利への道歩む AML0            | ……伊高 浩昭    |
| 15 | ペルー音楽 歌い継がれる記憶：レタマの花                       | ……水口 良樹    |
| 17 | メキシコの食巡り グリーンピースとジャガイモのオムレツ                | …ミゲル・アクーニャ |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み                        | ……小林 致広    |

2018年7月14日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

# 闘う女性たちの集会-2018年春のサパティスタ運動から

角 智春

今年の春、メキシコの先住民運動組織として有名なサパティスタ民族解放軍（以下、EZLN）は、「女性の集会」を開催した。いまなぜメキシコで、女性をテーマにした企画が呼びかけられ、そしてそれに応じて、大勢のひとが集まるのだろうか。

2018年3月8日から10日まで、「第一回闘う女性たちの国際・政治・芸術・スポーツ・文化集会」が、チアパス州のサパティスタ自治区（モレリア）で開かれた。冷涼なチアパス高地地域と州東部を覆うラカンドン密林地域のあいだに位置する会場には、40カ国以上から約5,000人の「女性」が詰め寄せた。大勢を現地で迎えるEZLNのメンバー約2,000人も、全員「女性」である。

3月8日は「国際女性デー」だ。この日を初日として三日間、女性たちは会場である自治区内に泊まり込み、朝から晩までみっちり詰め込まれたプログラムに参加する。会場は20数ブースに分けられ、あるところではバスケットボールやサッカーの試合、べつのところでは音楽や演劇やダンスのステージ、またべつのところではアートや伝統医療のワークショップが開かれる。

昼も夜も、ちいさな交流の輪を無数に生み出す会場のなかには、ときおりドラムマーチの一団や、ろうそくを手に月の下を行進する列があらわれ、場の一瞬の空気をさらって、通りすぎていく。

本イベントが開催された時期、EZLNの活動はどのような流れのなかにあったのだろうか。こここのところのEZLNは、メキシコ大統領選挙（2018年7月1日投開票）というタイミングにあわせて、ある「女性先住民候補者」擁立のためのキャンペーンを展開していた。

メキシコでは、この度の大統領選から、有権者による賛同の署名約87万を集めるという条件を満たせば、政党に属さずとも無所属立候補者として出馬することが可能となった。

そこで、EZLNと共闘関係にある先住民運動のネットワーク「全国先住民議会（CNI）」は、「先住民統治議会（CIG）」という政治組織をつくり、組織の代表である先住民女性マリア・デ・ヘスース・パトリシオ・マルティネス氏（愛称マリチュイ）を無所属立候補「希望者」として、全国選挙庁に登録した。

2017年10月から2018年2月、つまり「闘う女性たち」のイベントが開かれる一か月前まで、EZLNは、CNIやCIGとともに、出馬公認のため（つまり、立候補希望者から「立候補者」になるための）の署名を集めつつ、マリチュイの存在を全国に周知させるための全国行脚キャンペーンを行っていた。

マリチュイのキャンペーンは、先住民をはじめとした多様なメキシコの人びとの存在を可視化し、その人びとが抱える問題（例えば、政党政治がもたらす腐敗と暴力、土地や資源をめぐる多国籍企業との対立、国家によ



写真1：女性サパティスタ・バンドの演奏



写真2：自律的な婦人科医療についてのワークショップ

る不正な逮捕や強制的失踪、麻薬犯罪組織の脅威、先住民や女性への差別)を訴えること、そのうえで、当事者同士の連携関係を全国規模において強化することを目的としている。

EZLN や CNI は当初から、選挙や署名集めのことを、あくまで社会運動の呼びかけのための手段として位置づけ、政治家・政党としてのポストを得ることを狙った計画ではないとされていた。大統領選の時機にあわせて運動を行い、国政が無視している、あるいは掬い上げることのできない、「別の政治」の側面をみせようとする試みであった。

キャンペーンは結果として、所定の署名数を集めることができず、マリチュイの大統領選出馬は叶わなかった。しかしキャラバンの甲斐あって、彼女の存在は広く知られ、メディアからの注目も集まった。

したがってこの時期、サパティスタ運動といえば、まず「先住民女性として大統領選に挑戦したマリチュイ」という人物の印象と結びつくかたちでイメージされるものであったと言えよう。それまでサパティスタ運動を強く意識していなかった人たちも、「女性」という主題を手がかりに、運動に興味を持ったり、協力関係の模索を試みたりした。

サパティスタ運動にとって、2018年春というタイミングがもつ意味を振りかえってみた。こんどは、視点をメキシコ全体、そしてラテンアメリカ全体の状況に転じてみたい。

EZLN がインターネット上で公示した、今回の集会への参加資格は、「家父長的で男性中心主義的な資本主義に対抗して闘う女性であること」のみである。それ以外の説明はほとんどなにもなかった。そもそも性をめぐる諸テーマは、あの国・あの大陸の内外で、時代を越えて、多様なかたちをとって問われつづけてきたものであり、EZLN のこの曖昧な「イベント要領」の解釈も、もちろん Web ページの読み手の数だけひらかれている。運動の狙いや動機を、なにかに固定することはできない。

ただし、一定以上の規模と内容の質を伴った「女性の集会」が成功することの背後には、人びとがずれたり重なったりしながら分有する、問題意識や記憶や感覚もあるだろう。



写真3：フェミニサイドの記憶を刻んだ刺繍作品

そうした意味から、このイベントがなぜいまここで、とあえて問うてみるとすれば、そのひとつの答えとして、ラテンアメリカを覆う「フェミニサイド（スペイン語で *femicidio*。直訳は女性の殺害）」の問題が見逃せなくなってくる。

フェミニサイドとは、「ジェンダー（女性であること）を理由に女性が殺害されること」である。1990年代初頭に、米墨国境に接するシウダー・ファレスという町（チワワ州）での女性連続殺人事件が問題化したのち、今日までの20数年間でフェミニサイドは激化・拡大し、メキシコ全土で頻発する事件として認識されるようになった。

個別の状況は異なるが、ラテンアメリカのあらゆる地域においてフェミニサイドは強い危機感を引き起こしている。「これ以上ひとりの犠牲者も出さない *Ni una menos.*」、「わたしたちは生きてい／わたしたちに生を *Vivas nos queremos.*」といった共通のスローガンのもとで、抗議運動が日々続いている。2016年の時点（最新）で、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会は、ラテンアメリカをフェミニサイドがもっとも起こっている地域とした。

「フェミニサイド」という概念と用語は、こうした女性の殺害が構造的に編み出された事態であり、また、慣習と心性（メンタリティ）にかかわる社会的・文化的現象の帰結としてみなされるべきであることを示すために作られた。裏を返せば、これは女性の殺害の多くが性への偏見と結びついた犯罪であることへの認識が未だ低い、ということからきている。

実際に、フェミニサイドをめぐる最たる問

題点は、それがなかなか可視化されないことである。メキシコで女性が殺害された事件のうち、フェミニサイドとして捜査・裁判のプロセスを受けるものは30%程度に過ぎない。これには、法整備や正確な調査に臨まない行政の怠慢が関わっている。

全容を把握するのが困難であることを前提としつつ統計結果を見てみると、2015年から2017年までのあいだに、女性の殺害数（フェミニサイドでない可能性も含む）は52%上昇している（2015年=2,144人、2016年=2,790人、2017年=3,256人。出典：SESNSP）。フェミニサイドの犯行は、しばしば過酷な暴行やレイプを伴う。加害者（の男性）は、被害者の親族や恋人である場合から、見ず知らずの他人である場合もある。後者には、麻薬犯罪組織の関与のもとで性産業が拡大している、という近年の状況が多分に関わる。

この点に注意すると、メキシコが新自由主義的経済政策に本格的に舵を切った直後の時期に、マキラドーラ（一種の関税特区）の町シウダー・ファレスから事件の問題化がはじまったということには、かなり深刻な意味が孕まれていると推察される。いずれにせよフェミニサイドは、社会に蔓延した性にかんする不公正や差別感情が、経済的状況と絡み合いながら、「殺人」という最悪のかたちをとってあらわれたものだ。

「メキシコでは、一日に7人の女性が殺され、3分に4人の女性が性的暴行を受ける」という表現すらある。どうしてこれほど多くの人間が、女であるという理由で殺されなければならないのか。あえて語気を鋭くしてでも、いま問わなければならないのである。

マリチュイという女性、そして近年のラテンアメリカにおけるフェミニサイドの問題化とそれへの抗議運動という2点から、集会の背景を考えた。では、実際の集会の様子を具体的に記してみよう。

広い自治区の広場に3つ組まれたステージでは、バンド演奏や演劇が披露されていた。サパティスタの10代の女性たちによる人気バンドが、「女性がいなければ革命はない！」と歌



写真4：目出し帽のサパティスタ女性とのサッカーの試合

い上げ、会場は大盛り上がり。演劇では、かつてコカ・コーラの工場が先住民共同体の女性たちをどのように使役していたのかを、サパティスタ自らが演じて伝える作品が、ひととき大きな注目を集めていた。

会場には女性の姿しかなかったが、サパティスタの男性たちも裏方としてたくさんの仕事をしていたことが予想される。サパティスタの女性たちは、食事の提供、会場の清掃、医療サービスの提供などのために、早朝から深夜まで動きまわり、5,000人の参加者をアテンドしていた。そのうちのひとりが、「みえないところで、男性たちがわたしたちの食事を作っているのよ」と、いたずらっぽく話していた。

先述した3つのステージも、今回にあわせて新設したもののようである。集会の約一月半後に行われたスピーチにおいて、EZLNのガレアーノ副司令官（元マルコス副司令官）は、「ひとつで充分じゃないかって、男たちは言ったのに、3つ要ると女性たちが主張するから、仕方なく「男性の連帯」で作ったんだ」と述べて、笑いを誘っていた。

そのようにしてつくられた会場には、絵・版画・写真といったアート作品が大量に運び込まれ、壁という壁を飾っていた。フェミニサイドの記憶を刻んだ刺繍作品（写真3）や、ほかの社会運動との組織化を表明する絵画・横断幕がいたるところに展示されていた。

スポーツの試合では、全ての球技種目のリーグ戦において、サパティスタのチームが圧勝していた（写真4）。35度越えの炎天下のなかではたいそう暑く、視界を遮りもするであろう目出し帽を被りながらの試合で、彼女たちは圧倒的な成績を収め、「あの子たち、とんでもないよ」と畏怖されていた。

そのコート横で開かれる、コンテンポラリーダンスやヨガのワークショップでは、知らないひとたち同士が、音楽にあわせてゆったりと身体を動かしながら、次第に打ち解け合っていた。

飛び入り参加を誘う企画も多数あった。例えば、冒頭で触れた、夜の行進。その場に集まった人たちにこれから歌う歌詞を手早く伝え、会場を端から端まで歌って移動しながら、ろうそくの火を分けつつ、列を延ばしていく。日の沈んだ高地に、女性たちの声はその厚みをじわりじわりと増しながら響いていた。

この集会にとって、メキシコ国内外の先住民の女性の参加が重要であったことも忘れてはならない。マリチュイ（ハリスコ州、先住民民族ナワ出身）本人と CIG の議員たちも、会場を訪れていた。大統領選の話題によって、メキシコではすっかり時の人となっている彼女たちが、特別なボディガードや優先席の手配を受けるわけでもなく、ふつうの人たちに混じって無防備に舞台を観ている姿は衝撃的であった（写真 5）。

「政治の重要人物になっているのではなく、人々の声そのものになっているだけ」とつねに自身を説明するマリチュイ。そのポリシーは、3月のチアパスにおける佇まいのうちにもあらわれていた。

幼い子どもからおばあちゃんまで、いろいろな「女性」が、これほど雑多な内容を盛り込んだ空間に集まっていた。サパティスタの女性は、闘う女性たちの集会の開会式で、つぎのような言葉を読み上げている。



写真 5：サパティスタと先住民民族マプーチェの女性らの交流。壇上には CIG の議員も

「いまわたしたちは、ここに、まるで〔とどりの木々からなる〕森や山のように集まっています。わたしたちはみな女性です。しかし、肌の色、身体の大きさ、言語、文化、職業、考え方、闘い方には違いがあることも、わたしたちは知っています。それでも、わたしたちは女性であり、しかも闘う女性なのです。つまり、わたしたちは、互いに異なり、しかし同じであるということです。（…）そして暴力と死によっても、わたしたちは、同じ境遇に置かれています。

（…）だから、話し合い、聴き合い、まなざしを向け合い、たがいをもてなしあうために、わたしたちは、あなたたちを招待するのです」

様々な違いをもっているけれども、「女性である」ということ、また、「女性であるがゆえに差別や暴力といった深刻な問題に曝されている」ということにおいては同じ立場にある者たちの出会う場が、この集会であった。女、女、と強調しているようにも思える運動は、しかしつねに、動機と目的を越えて、「みんなちがう」ということを思い知らせる場にもなる。

一方で、「女だからおなじ」なにかがあることも事実である。女性の身体を持っている、あるいは社会から女性として認識される、ということから、人びとは現にいのちを脅かされるほどの危険を分け持ってもいるのだ。そうした意味でそこは、単に女が女であるから集まる場なのではなく、女にされているから集まる場、でもある。

わたしにとって「女性の集会」は、偏狭な枠組をむしろ解体する瞬間の連続であった。サパティスタの言葉と反響するこの感覚が、あの空間にいたたくさんのひとのなかに生まれていたのではないだろうか。

「集会（encuentro、出会い）はあくまで集会であって、ここは文字通り最初の出会いの場面でしかない。このあとになにが続くのか、が、運動の本体でしょう？」。ある友人がこう言った。集会を終えてこの言葉の延長線上を歩いていくのは、「彼女はひとりじゃない No está sola.」という合言葉をおなじ女性としてくりかえしつつ、ばらばらに散っていった人びとである。

# メキシコ麻薬戦争の真実－行方不明の家族を探す人々 & インスタレーション「記憶の足跡」

山本 昭代

8月30日、国連が定めた「強制失踪の被害者のための国際デー」に合わせて、メキシコのいわゆる「麻薬戦争」の現状を考えるイベントを開催します。

メキシコでは、この12年近くの間には20万人以上の人々が殺害され、行方不明者は公的に発表されただけで3万4000人、実際には5万人ともいわれています。犯罪組織や組織と癒着した警察などの手で、多くの若者が拉致され、行方知れずになっているのです。それを探すのは、多くは犠牲者の母親たちで、各地で同じ立場の女性たちがグループを立ち上げ、当局と交渉し、恐怖を乗り越えてみずから捜索に乗り出しています。

そのような行方不明者家族の会のひとつで、メキシコ東部のベラクルス州で活動する「ソレシート」の会の代表女性を日本に招待し、講演会を行う予定です。

メキシコではこの7月1日、大統領選挙と多くの地方選挙、国会議員選挙が行われました。左派のアンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドールが次期大統領に選出され、また国会議員選挙でも次期大統領の政党である「国家再生運動(MORENA)」が全国的に圧勝しました。汚職と治安問題が大統領選挙の大きな争点のひとつとなっていました。それまでの贈収賄や不正蓄財スキャンダルにまみれた保守政党とは一線を画しているクリーンなイメージの次期大統領に国民の期待が集まっています。

しかし、選挙年に当たった今年、かつてない激しい暴力がメキシコ全土を吹き荒れていることは、それほど大きなニュースになっていないようです。昨年、殺人件数は記録がとられ始めて以来、過去最悪の2万5000件を記録しました。しかし、今年の殺人件数はそれを上回る勢いで、選挙関連で殺害された政治家の数は、昨年から145人とかつてない数の犠牲者が出ました。殺人事件の背景はいろいろある



「ソレシート」代表のルシアさん

にしても、その数を押し上げているのは犯罪グループ間の抗争です。これは当分の間、さらに激化する恐れもあります。政権が交代することで、行政機関や警察などの組織も入れ替わり、当局と癒着していた犯罪グループが新たに勢力争いを繰り広げかねないからです。

殺人事件が起これば、同時に行方不明者も増えます。組織は犯罪を隠すために犠牲者を埋めたり焼却したりすることもあります。また身元不明の遺体が発見されても、警察は人手が足りず(あるいはやる気がなく)、DNA鑑定などもなかなか進みません。そのため、行方不明になった家族を探す人々の元に発見された遺体はなかなか戻されないのが実情です。

ベラクルス州でも、治安悪化に歯止めをかけられなかった現政権側の保守政党PRIの候補が敗れ、Morenaの候補が当選しました。行方不明者の捜索にかんしても対応が改善されることが期待されています。

この夏のイベントは、(1)「ソレシート」の代表、ルシア・ディアスさんの講演会、(2) インスタレーション「記憶の足跡」の展示、(3) ドキュメンタリー映画上映、という3つです。

それぞれの詳しいスケジュールに関しては、別刷りのチラシをご参照ください。

## (1) ルシアさん講演会

ベラクルス市を中心に活動する行方不明者家族の会「ソレシート」は、メキシコ各地の捜索グループのなかでも活発に活動している組織のひとつです。

会の創始者で代表を務めているルシア・ディアスさんは、2013年に息子が誘拐され、2014年からこの会を立ち上げました。「ソレシート (solecito)」とは「小さな太陽」という意味で、会の発足当時、SNSのアイコンに日の出の写真を使っていたことから、それが会の名前になったといえます。

ベラクルス市では、市郊外で発見された秘密墓地から300体近い遺体が発見されています。その規模は中南米でも最大レベルといわれています。

発掘作業の継続や当局との交渉など、困難な仕事を進めてきたことから、ルシアさんは2017年度のメキシコ人権賞の特別賞を受けました。また同年、オランダ・ハーグにおける人権活動家に対する「シェルターシティ」プログラムにも招聘されています。またソレートの会は、ベラクルス大学から「栄誉賞」を受賞しています。

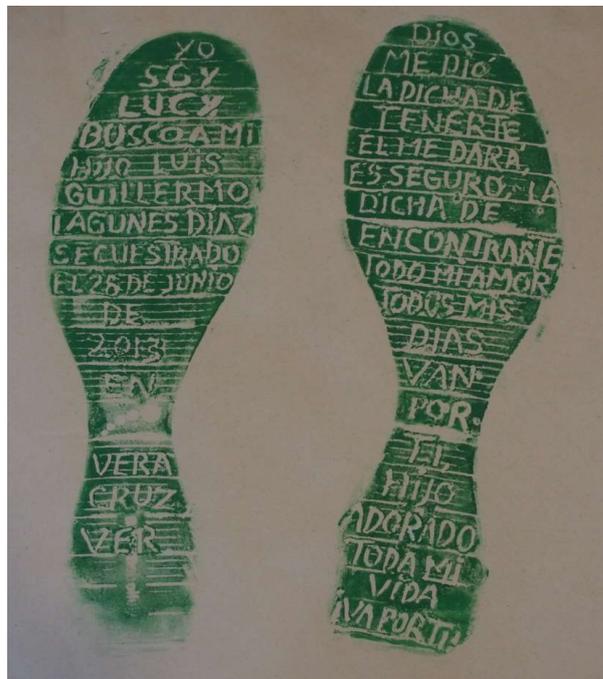
## (2) インスタレーション「記憶の足跡」

メキシコ人の彫刻家アルフレド・カサノバ氏とそのグループによる作品です。

行方不明の家族を探している人たちが履いていた靴を提供してもらい、その靴底にその人の思いのたけを述べた言葉を刻み、版画にします。提供された靴を天井などからつるし、その版画とともに展示します。これまでにヨーロッパ各国、南米、メキシコ国内各地で巡回展示されてきました。



行方不明の家族を探している人たちが履いていた靴



<p>左 私はルシー。 2013年6月26日、ベラクルスで誘拐された私の息子ルイス・ギジェルモ・ラグネス・ディアスを探している。</p>	<p>右 神様は私にお前の傍にいて幸せをくださった。これからはそうでしょう。お前に出会える幸せは確かです。私のすべての愛、すべての日々はわが愛する息子よ、お前とともにある。私の全人生はお前とともに歩む。</p>
------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

靴底に刻まれた言葉

この「記憶の足跡」とともに、メキシコシティのコヨアカン公園に日曜ごとに集まって刺繍をしながら反暴力を訴えているグループ **Fuentes Rojas** (赤い泉) の刺繍を展示します。麻薬戦争の犠牲者に限らず、新聞の片隅に載っただけの、忘れ去られてしまいがちな暴力の犠牲者の名前とその記憶をハンカチにとどめようというものです。スペイン語の翻訳は、東京のレコム会員が手分けして行っています。



コヨアカン公園で刺繍を展示するグループ「赤い泉」

### (3) ドキュメンタリー映画『ある捜索の記録』 の上映

メキシコ・麻薬戦争の犠牲となり、行方不明になった家族を探す3人の女性たち（ナティビダ、マルガリータ、グアダルーペ）の活動のドキュメンタリー映画。娘や息子を探す3人は、それぞれのやり方で捜索に乗り出し、理不尽な現実に向き合う。

ナティビダは、毎日のように警察の誘拐対策課に電話をかけ、夫ともに行方不明になったきり何年もたった娘ダリアの捜査の進展を尋ねる。しかし、いつも木で鼻をくくったような返答しかない。娘の不在のなか、ナティビダはダリアが残した幼い孫を懸命に育てている。裕福な階層に属しているグアダルーペは、行方不明になった息子ホセ・ルイスを自ら棒を手に荒れ地を探し、そしてついには、当時のカルデロン大統領に直訴するにいたるが…。

一方、マルガリータは、娘のジャアイラを探す。娘は軍人と結婚していたが、オアハカ州で失踪した。捜索の末、ついに当局を動かし、娘だという頭部のない遺体を出させ、また娘の最期に立ち会ったという男の証言を得るにいたる。

マルガリータは真相究明を求めてほかの母親たちとともに内務省前でハンガー・ストライキを行い、グアダルーペは詩人で活動家のハビエル・シシリアの「平和のためのキャラバン」とともにワシントンまで行く…。

原題：Retratos de una búsqueda

監督：アリシア・カルデロン、メキシコ、  
スペイン語、2014年、74分。

日本語・英語字幕。



米国ワシントンでの抗議行動



「平和のためのキャラバン」代表、詩人ハビエル・シシリア

ニカラグアで、4月18日以来深刻な政治危機が続いている。政府による年金制度の見直しが発表され、それに反対する学生らの抗議が起こったのがきっかけだ。政府はこの抗議デモを暴力的に弾圧し、7月3日現在で309人の死者が出るという事態になっている。

### 直接の原因

年金制度の改正は、保険料の値上げや年金受給額の減額などが盛り込まれたものだった。4月18日に大学生約300人による反対デモが行われた。翌日19日にはさらに多くの大学生、一般市民らも加わって大きなデモとなった。

デモは平和裡に行われていたが、それに対し、与党サンディニスタ党(FSLN)の実動部隊である青年組織フベントウ・サンディニスタ(JS)が大挙してデモ隊を棍棒や鉄棒で攻撃し、出動した警察と治安部隊は何もせずにそれを「見守る」という事態となった。

この様子はすぐにSNSや、独立系のラジオ、テレビでも報道され、多くの大学生が繰り出しデモに参加した。その様子もインターネットなどで紹介された。翌日からは、さらに多くの学生が続々とデモに参加、首都マナグアだけでなく、レオンやリバスなどの地方都市でも同様に学生が街で抗議運動を行った。これに一般市民も加わり、大規模なデモがあちこちで繰り広げられた。



最初に倒されたのは腐敗のシンボル、チャーヨ(副大統領の綽名)という金属製「生命の樹」。2013年以降、マナグア市内に140本建設(330万ドル)。(BBC mundo.com、4月24日)

### 政府の弾圧

これほど大きな抗議運動が起こると予想していなかったオルテガ大統領は、武力でこれを弾圧すべく、さらに警察と治安部隊を動員した。これにより多くの学生が負傷し、カトリック教会は彼らを守るために扉を開いた。20日には銃弾による初めての死者が出た。私服を着た狙撃隊も動員され、デモ隊に発砲したのだ。警察によるデモ隊への武力弾圧は市民に大きな衝撃を与えた。

それまで、ニカラグアは「中米で最も安全な国」であり、警察と軍は非常によく組織され市民から信頼もされていたのである。その警察が、突然、平和裡に行進していた人々に武器で襲いかかったのだ(注1)。

### 危機の前に

4月3日にニカラグア南東部(コスタリカとの国境付近一帯)にあるインディオ・マイス自然保護区で火災が発生した。火事は燃え広がったが、政府は二日間これを放置したために状況は悪化した。コスタリカなど国際社会からの支援を拒否し、環境団体らを地区から締め出した。これに危機感をもった300人以上の学生が、首都で政府の対応を批判するデモを行った。

これに対抗して、JS1,000人が動員され、火事に対する政府の対応を賞賛するカウンター・デモを行った。4月12日には批判する学生の数が増えてデモをしようとしたところに、警察の治安部隊が出動し、デモ隊を鎮圧した。結局、保護区の火災は13日に雨が降って沈静したために、問題はそれ以上広がらなかったという経緯があった。

### 広がる抗議、犠牲者も増加

だが、今回はそうはいかなかった。政府の思惑とは逆に、抗議運動はさらに大きくなり、問題は年金制度の改悪反対からオルテガ大統領とその妻で副大統領のロサリオ・ムリージョの退陣要求に変わっていった。オルテガが政

権に就いてから 10 年の不満（事実上の独裁政権で、大学の自治や地方自治が骨抜きにされ、民主主義の欠如、市民権行使の制限など）が一举に吹き出したかのような感じだ。

デモが始まってから数日で 50 万人を超える人々が街に繰り出した（ニカラグアの人口は 600 万人余り）。それにつれて、死者の数も増していった。また、「暴徒」によるスーパーや商店の略奪、サンディニスタ系市長がいる市庁舎の焼きうちなども起こった。

これらの蛮行に関して、オルテガ政権は反対派によるものとしていた。しかし、人々の証言や録画されたビデオなどによると、JS や武装グループによるもので、警察は見ていただけ、あるいは略奪物の運搬を手伝ったりしている様子が見られる。そうしたことから、事実とは逆であることがわかる。

スーパーの略奪を近くの住民たちが力を合わせて阻止する様子も見られた。政府による弾圧や商店の略奪を防ぐためにあちこちで市民によるバリケードも築かれはじめた。

### 「対話」も頓挫

SNS を通じての告発がリアルタイムで世界に送られると、政府によるデモ隊への暴力が国際的に非難されるようになった。これに対し、オルテガ政府は国内と国際社会に向けて声明を出し、これは「人々を恐怖に陥れるための具体的な政治的目的を持った反対派右翼によるもの」とし、暴力は「ニカラグアを組織犯罪の手に渡そうとする陰謀」と決めつけた。

しかし、オルテガ政府も譲歩せざるを得ず、年金改革を凍結することと、起こったことを調べる真相究明委員会の設置、市民セクターとの「対話」を行うことを約束した。「対話」は、カトリック教会が仲介となり、学生、経済界、農民組織、人権団体などが集まって作られた「正義と民主主義の市民同盟」（アリアンサ・シビカ）とのあいだで行われた。しかし、総選挙を来年 3 月に繰り上げて行うというアリアンサ・シビカの提案に対して、政権側は「クーデターだ」と反発し、対話は頓挫した。

### 国際社会の調査

真相究明委員会は、米州人権委員会 CIDH



通りを埋め尽くす抗議の人々、首都マナグア  
(El Nuevo Diario 紙 5 月 8 日)

を招いて調査を依頼した。CIDH は 1000 人以上の被害者や遺族らから証言を聞きとり、報告をまとめた（5 月 22 日）。

報告は、「深刻な人権侵害」「拷問」「超法規的殺人」など非常に強い表現で、一連の人権侵害は国家治安部隊とそれに準じる武装グループによる過剰な暴力が原因と結論している。そして、政府に対し人々への弾圧をただちにやめること、市民の表現の自由を尊重することなどを勧告した。

アムネスティ・インターナショナルもニカラグアで現地調査を行い、『殺すために撃つ』と題した報告を提出し、狙撃隊ははっきりと殺す目的で市民に発砲したと結論づけている。国連人権高等弁務官事務所も特別報告官をニカラグアに派遣している。さらに CIDH は独立専門家調査チームを作り派遣した(7 月 5 日)。

### 続く抵抗

人々による抵抗は続き、それに対する政府の弾圧も続いている。アリアンサ・シビカは母の日（ニカラグアは 5 月の最終日曜日）に大きなデモ行進を組織したが、この時も死者が出た。6 月の最終日曜日にも、これまでに殺された人たちに花を捧げる「花のデモ」が行われ、多くの人々が参加した。

二ヶ月以上におよぶこの政治危機は、ニカラグアの経済にも深刻な影響を与えている。物流に支障をきたし、6 月末までに 20 万人以上が職を失った。観光客も激減し、700 以上のレストラン、400 以上のホテルが閉鎖された。100 万人以上が貧困に陥るという予想もある。この危機が長引くとさらに状況は悪化する。



アリアンサ・シビカの会見（La Prensa 紙, 7月6日）

5月5日から14日にかけて行われたアンケートでは、69%がオルテガとムリージョの退陣を要求している。

### 今後の行方

いずれにしても、オルテガが2022年の任期終了まではもたないだろう、という見方が優勢になっている。オルテガは時間稼ぎをして、反対派が疲弊するのを待ちながら、出口を探して米国と秘密裏に交渉していると言われて（注2）、その間も人々への弾圧は続いている。父親に抱かれた14ヶ月の赤ん坊が頭を撃ち抜かれて死亡する事件や、反対派リーダーへの選別的な弾圧として、子どもを含むある家族が家ごと焼き殺されるなどの事件も起こり、人々に大きなショックを与えた。また、アリアンサ・シビカに参加している起業家らへの報復として、彼らの所有する土地を農民らに不法占拠させたるようなことも行なっている。

### オルテガ後に残る問題

オルテガが辞任し、ニカラグアから出て行くというシナリオが現実味を帯びるに従って、総選挙の実施、準軍事組織・暗殺部隊の武装解除をどうするか、などその後をどうするかという問題が出てくる。アリアンサ・シビカにしても、今は反オルテガでまとまってはいるが、利害関係は複雑で、「オルテガ後」のビジョンが一致するかどうかは疑問だ。

アリアンサ・シビカはさらなるゼネストとデモを呼びかけており、今後事態がどのように推移するかは不透明だ。事態を一刻も早く解決させるため、オルテガ政府に対する国際社会からの圧力がより一層重要になるだろう。

注1: 実際には、オルテガは大統領に就任した翌年2008年から、秘密裏に準軍事組織を作っていた。退役軍人・警察官、さらには地域のギャング団らも入っているそうである。選挙で反対派の攻撃や、反対デモが起こった時に動員していた。だが、これまでは大規模な反対運動にいたらなかったために、一般には知られていなかったようである。ニカラグア憲法では、軍と警察のみが武装を許されており、このような準軍事組織は、明らかに憲法違反である。

注2: ニカラグアは、チャベス時代のベネズエラから石油などの経済支援を受けていた。オルテガはそれを受け取り、国庫を通さずに、選挙資金や個人的な資産として米国など外国の銀行に移していた。

大統領を退いた後、その資産を使うためには米国の了解が必要となる。というのも、米国には人権侵害や重大な汚職を犯した政府関係者など外国の人物に対し、米国のビザを出さない、米国内にある資産の凍結を行う、また米国企業にその人たちとの取引を禁止するグローバル・マグニツキー法があるからだ。

ニカラグア人では、昨年末に選挙最高法廷の長官が対象になり、今回の危機で、新たにオルテガに近い3人が対象に指定された。オルテガの息子たちも対象になるという噂もある。

### 参照:

Revista Envio 誌, 2018年5月号~7月号、  
BBC Mundo.com, La Prensa, El Nuevo Diario, Última Hora のインターネット版、2018年4月18日~7月7日

アリアンサ・シビカのHPでは抗議が始まってからのタイムラインが見られる。

(<https://www.alianzacivicanicaragua.com/es/>)

### カリブ海側ワスパンの状況

ワスパンは、太平洋側とは状況がまったく異なる。反オルテガの抗議活動はなく、表面的には落ち着いている。

昨年12月の市長選で FSLN から出馬して当選、今年1月から市長に就任したローズ・カニングムさんは、難しい立場に立たされている。ミスキート政治団体であるヤタマから度重なる脅迫を受けているからだ。

ヤタマは政治的混乱を利用して、コミュニティで略奪行為を行うなど、地域での影響を強めるべく画策している。もともと反サンディニスタ色の強い地域だけに、微妙な舵取りが要求される。

# 「生活改善」でムラ再生 コスタリカ

藤井 満

戦後直後、日本の農村に導入された生活改善運動は、外からの援助に頼るのではなく、女性たちが小集団をつくって身近な課題を掘り起こし、かまど改良や保存食づくり、栄養改善といった実践を積みかさねた。一人ひとりが「考える農民」になることで、農村女性の地位向上をもたらした。そんな手法が21世紀の中南米諸国に導入され、つぶれかけた共同体が再生する例も生まれている。

中米コスタリカは、九州と四国を合わせたほどの国土に490万人(2016年)の人が住み、「軍隊のない国」として知られる。私は2017年7月、首都サンホセの北西約70キロのプンタレーナス州ミラマールというまちからタクシーに乗り、山奥の共同体をめざした。

川の汚染によって数年前に閉山された露天掘りの金鉱山跡を経て、急な山道を1時間余りさかのぼる。アランシビアという村のはずれ、標高1200メートルの斜面に5軒の家が点在する集落がめざすAMAGRO共同体だった。雨期の午後にはかならず雨が降り、セーターが必要になるほど冷え込む。コーヒー栽培にうってつけの気候である。

木造平屋建ての集会所に入ると、10人ほどの住民が集まっていた。「この集会所も生活改善がはじまるまでは、だれも使わず朽ちかけていました」とAMAGRO代表のフランクリン・ヒメネスさん(50歳)は言った。

今は5世帯20人の住民が月に何度も集う。壁のペンキも塗り替え、屋根も葺き替えた。机や椅子も手作りした。雑草がきれいに刈り払われた庭の下には5年前に浄化槽を設け、家々の下水を管で集めている。以来、ドブの汚水に発生していた蚊やハエが激減した。

集落は1984年、農地改革によって36ヘクタールの農地を獲得した12軒が協同組合を結成して発足した。政府の支援で住宅やコーヒー農園、テラピアという淡水魚の養殖池などが整備され、コーヒーの売り上げから各世帯

に賃金が支払われた。旧ソ連の集団農場コルホーズのような経営形態だった。

だが、経営が行き詰まって借金がふくらみ、組合の経営は破綻した。子どもの教育のためにもあって、1995年ごろから1軒、2軒とまちに下り、5軒に減ってしまった。

日本の国際協力機構(JICA)は2002年から、第3世界の地域振興の手法として「生活改善」に着目し、中南米やアフリカに広めてきた。従来の地域振興策は、家庭の収入を増やすことに主眼を置いたが、生活改善は生計と生活を区別し、かならずしも収入が増えなくても、創意工夫で生活の質を高めるというとりくみだ。

だが、中南米の農村は従来型の援助に慣れているから、その思想はなかなか理解されなかった。

AMAGROには2010年ごろ、農牧省のスタッフ3人が訪れて説明会を開いた。経済的な支援ではなく「考え方」を教えるだけだと聞いて、フランクリンさんも「お金がなくて豊かになれるわけがない」と最初は思った。だが、生活改善による日本の農家の変化を紹介するビデオを見て、「今あるものを使って、できることから変えていけるかもしれない」と思った。

AMAGROの人々は、山奥で借金まみれの苦悩の日々を送ってきたからこそ、わずかな「改善」に希望を見出したのかもしれない。日本でも条件の悪い地方の方が生活改善運動は盛んだった。

フランクリンさんの妻フロールさん(44歳)はビデオを見て、台所の洗い場の位置を高く



煙突を設けた改良かまどと腰の高さにした洗い場(奥)について説明するフロールさん

家畜の糞でガスをつくる「バイオガス」プラントとフランクリンさん

する例に注目した。自宅の洗い場は、太股ほどの高さで、腰をかがめて洗うから腰痛がひどかった。しかも煮炊きをするかまどと離れていた。洗い場をかまどのわきに移して、高さを腰の位置にかさ上げしたら、腰痛が治った。かまどの煙で家中がすすけていたから、煙突も設けた。薄暗い食堂の壁を抜いてカウンター型にしたら、風が抜けるようになった。

「新しい家を建てなければ快適にならないと思っていたけど、自分たちの力で、少しずつ改善できると気づきました」

牛や豚の糞をためてガスを発生させるバイオガスの施設もつくり、燃料代も大幅に節約できた。

ロベルト・ベナビデスさん（62歳）とマルタ・ソラーノさん（56歳）夫妻は、共同体の外でしばらく暮らしていたが4年前にもどってきた。トタンの小屋に床はなく、雨が降ると家のなかまで水が入ってきた。まずはコンクリートの床をつくり、板切れで壁をつくって、寝室や子どもの個室を設けた。

マルタさんは肥満で病気がちで呼吸も困難だった。それまでの食事はコメやマメ、ジャガイモなどの炭水化物ばかりだった。生活改善の活動で栄養の知識を学び、庭でさまざまな野菜を育て、サラダを毎日食べるようにした。塩や油、コーヒーに入れる砂糖を減らした。半年後、体重は71キロから61キロに減った。

「トウモロコシや豆は畑でつくっていたけど、野菜はバスで1時間半かかるミラマールで買ったから、以前はめったに食べませんでした」と、別の女性も振り返る。

生活改善は、生計と生活を峻別し、カネ以外の部分で生活をよくするのが基本であるが、AMAGROでは経済的な効果も生みだした。住



ロベルトさんとマルタさんは、土の床の小屋を自力で少しずつ改善してきた。



ルイスさんの菜園。それぞれの家が小さな畑で自給用の野菜を育てている

廃墟になっていた集会所は美しく再生した。芝生の庭には浄化槽が埋め込まれている。

民たちは長年コーヒーを育ててきたが、収穫は年々減っていた。生活改善を通して、惰性で働くのではなく、頭を使って能率を高めようと考えようになった。

収穫減の原因をさぐると、コーヒーの木の樹齢が25～30年に達していたからだとわかった。そこで少しずつ新しい木に植え替えた。数年後には収穫は3倍になった。化学肥料を半分に減らして有機肥料も使いはじめた。

「以前は個々人がバラバラで、毎年何も考えずに同じ作業をつづけていた。生活改善によって、頭を使って、少しずつ確実に成長することや、お金を稼ぐより、人としてよりよく生きることが大事だと知りました」。子ども5人と平屋建ての家に住むルイス・ウレーニャさん（55歳）は話した。

AMAGROには子どもも多い。集会所の庭で遊んでいた10歳の女の子が「将来はお父さんとお母さんとコーヒーをつくりたい」と言うと、ほかの子たちも「私は果物をつくる！」「私は牛乳しぼる！」と応じた。以前は住民同士の会話も少なく、子どもが家の跡を継ぐことなど考えられなかったという。

かつての日本の農民もAMAGROの人々も、自ら大工仕事や土木工事、保存食品づくりもこなす。「百姓」のもつそういった潜在能力を最大限に発揮させるのが生活改善だった。

消費生活にどっぷり浸かり、物づくりの技術と創造性を失ってしまった私たちはどうなってしまうのか。AMAGROの示した可能性は、現代都市住民の危うさを浮き彫りにしているように思えた。

（初出は「リベラル21」2018年2月23日）

## トラテロルコ事件 50 周年、勝利への道歩む AMLO

メキシコ大統領選挙（2018 年 7 月 1 日）で野党 MORENA（国家刷新運動）候補アンドレス＝マヌエル・ロペス＝オブラドール元メキシコ市長（64 歳）が当選する可能性が濃厚だ。通称 AMLO（アムロ）、タバスコ州出身。銀髪、端正な風貌の紳士型政治家である。民族主義人民路線の改革派だ。労働党（PT）、社会出合い党（PES）と共に「フントス・アレーモス・イストリア」（共に歴史を創ろう）を結成、選挙戦を戦った。

AMLO は 2006 年と 2012 年の大統領選挙に出馬、いずれも敗れた。2006 年選挙では事実上勝ちながら、開票時に停電で電算集計機が停止、勝利を奪われたとされる。2 度目は、制度的革命党（PRI）の現大統領エンリケ・ペニャ＝ニエトの金権攻勢に歯が立たなかった。今回、「三度目の正直」を目指した。

今年は、1968 年 4～10 月、メキシコ全土で展開された学生主体の反体制運動の 50 周年。その結末は 10 月 2 日、首都のトラテロルコ三文化広場での大虐殺だった。その 10 日後のメキシコ五輪開会式の挨拶で主催者は、恥知らずにも「この平和なメキシコの空の下で」と言っただけだった。

メキシコ市に住み駆け出し記者だった私は、学生運動を追い続け、トラテロルコの現場で軍隊による惨劇取材し、メキシコ五輪をカバーした。「メヒコ 1968 年」は、半世紀を超えた私のジャーナリズム活動で十指に入る重要な取材経験である。

1968 年当時 15 歳だった AMLO は、メキシコ国立自治大学（UNAM）で政治学と行政学を修め、政権党 PRI に入党。1988 年にはクアウテモク・カルデナスらの党内改革派「民主潮流」に参加、同派は「国民民主戦線」（FDN）になる。同年の大統領選挙に FDN から出馬したカルデナスは投開票の不正で PRI のカルロス・サリーナスに勝利を奪われた。FDN は翌 1989 年、民主革命党（PRD）となる。

メキシコ市長を 2000 年末から 4 年半務めた AMLO は 2006 年の大統領選挙に出馬。2012 年選挙にも敗れた同年、PRD を離れ、MORENA を結成する。国民行動党（PAN）のカルデロン前政権の「麻薬戦争」による極度の治安悪化、現 PRI 政権の腐敗やトランプ米政権への屈辱的姿勢で、プリパニスタ（PRI・PAN 両党支配）体制が行き詰まったのを受け、2018 年選挙でついに AMLO に勝機が訪れた。必勝を期し財界や保守派と妥協したが、PRI、PAN、保守化著しい PRD と違う新味が改革への期待を促す。

AMLO と同時代の人物で、数年若いラファエル・ギジェン（61 歳）は UNAM 哲学文学部に学び、長い準備期間を経て 1994 年元日、チアパス州サンクリストバル・デラスカサスで武装蜂起した。すなわちサパティスタ民族解放軍（EZLN）の「マルコス副司令」（現「ガレアノ副司令」）である。同年元日に発効した「北米自由貿易協定」（TLCAN/NAFTA）やメキシコの支配体制に反逆し、先住民族復権を求めて蜂起したのである。私は同年 4 月、EZLN 蜂起現場一帯を取材した。

少年時代に起きたトラテロルコ事件を大学生時代に学んだ AMLO とギジェンは、政治家と先住民武闘組織指導者という大きく異なる道に進んだ。過去半世紀余りのメキシコの変遷を観察してきた野次馬である私は、AMLO の勝利への躍進に感慨を禁じ得ない。

☆ ☆ ☆ ☆

AMLO は、得票率 53.1% で、PAN-PRD 候補（22.2%）、PRI-PVEM-PANAL 候補（16.4%）に圧勝し、大統領に当選した。2018 年 12 月 1 日、大統領に就任することになる。

**訂正：**前号（164 号）の連載 65 回の記事で、17 頁右欄にある「あの 30 歳代後半」は、原稿で「あの 30 代後半」でしたので、訂正します。

## 歌い継がれる記憶：レタマの花

水口 良樹

ペルーという枠組みを超えて歌い継がれている歌がある。それは、人々の記憶の歌だ。人々が生き、笑い、暮らした場所で、異議申し立てをし、戦って大きな力の前に倒れ伏したという記憶を、けっして「歴史」として書かれることのなかったはずの事件を、大きな教訓として、忘れてはならない権力の暴走の苛烈さと、終わらぬ苦しみを背負って生きることについて、人々に大いなる気づきを与えている歌でもある。

その曲とは、「レタマの花」というアヤクーチョ地方のワイノだ。ペルーの南部、アヤクーチョ県の北部に位置するワクタという町で起こった虐殺を歌い継いだものだ。

ペルーの虐殺、しかもアヤクーチョ県というと、ペルーの内情に少しでも通じている人は、1980年代から1990年代にかけての毛沢東主義を掲げたセンデロ・ルミノソとペルーの軍双方によるアンデス住民虐殺を思い出す方もおられるだろう。ペルー真実和解委員会によれば、死者行方不明者7万人を超えるその虐殺の70%以上は、アンデス地域で起こっているという凄惨なペルーの「暴力の時代」である。中でもアヤクーチョはその最も激しい暴力の現場となった地域であるが、このワイノの中で歌われているのは、それよりもさらに10年以上さかのぼった、1969年の事件である。

当時、ペルーは左派軍部による軍事クーデターによって成立したベラスコ軍事政権下にあった。この左派軍事政権は、自らの社会改革を「ペルー革命」と表明し、農地解放や協同組合の設立、キューバとの国交正常化、資源などの国有化と、同年代の近隣諸国を吹き荒れた右派軍事政権とは真逆の政治的改革を断行した政権だった。この政権下で起こったのが「レタマの花」に歌われた虐殺事件なのである。

事の発端は、1969年に教育費に関する法律改正が決まったことであった。貧しいアンデス地域の人々にとって、教育費の値上げはそく死活問題に繋がる。そこで学生たちやその親が中心となって教育費値上げ反対のデモが行われた。そしてそのデモが警察と反テロ特



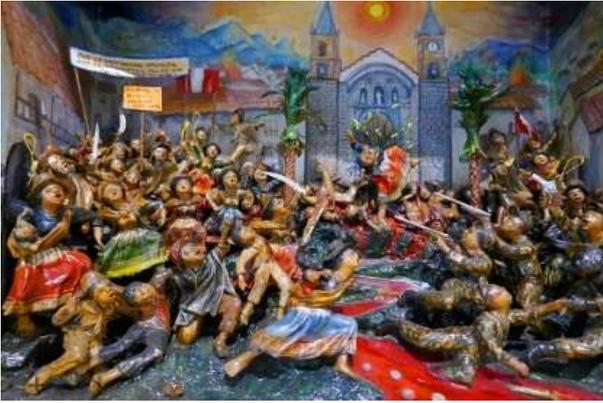
マルティナ・ポルトカレロ：  
1987年リマで伝説のライブ

殊部隊シンチスによって鎮圧される中で、20人の夜間学校の学生が犠牲となったのだ。この事件は「ワクタの反乱」と呼ばれ、この予定外の結果に大きな衝撃を受けた政府は法改正することを取り下げた。

この「ワクタの反乱」で犠牲となった学生たちを教えていた教師リカルド・ドロリエルは、この事件を追悼する意味も込めて一つのワイノを作曲した。それが「レタマの花」であった。この曲ははじめトリオ・ワクタによって歌われ1970年に録音されている。

1982年には編曲され生まれ変わった「レタマの花」がロス・エラデーロス・デル・ペルーによって歌われた。この楽団はリマや地方都市の広場や路上演奏を活動の場に選んでおり、それがこの曲をより広く人々へと届ける役割を果たした。そして同年、エラデーロスはこの曲の歌手に有名なワイノ歌手であったマルティナ・ポルトカレロを迎えて録音している。この彼女の歌によって、この曲は広く国境を超えて歌われる曲へと昇華されたといえる。彼女の歌のインパクトは大きく、ラジオなどのメディアがこの曲をとりあげ、一ヶ月で5万枚のレコードやカセットが売れたという。

こうしてワクタという小さな町で起こった事件は、ペルーだけでなく近隣諸国でも知られる非常に有名な事件へとなっていった。マルティナ・ポルトカレロの歌で大ヒットし



ワクタの反乱をテーマとするレタプロ（移動式祭壇から発達した民芸作品）「レタマの花」

た後にも、多くの歌手たちがこの歌を歌ってヒットを出している。まだ幼い少女の歌声で「レタマの花」を歌いヒットしたカリナ・フェルナンデスや、当時若手として売出し中であつたサイワなどがその代表格だ。

それでは、その歌詞とはどのようなものであつたのか。

「レタマの花」の歌詞は、皆でワクタの広場に行こう、レタマの黄色い花が咲くその広場に行こうと誘うところから始まる。そしてその場所が実は民衆の血が流された場所であるのだと歌いあげる。特殊部隊であるシンチスが突入し、学生たちや農民たちが殺されてしまった。黄色いレタマの花が咲く広場で、心ある人々が殺されてしまった、と歌はその悲しい歴史を振り絞るように語る。

そして、その後、フーガと呼ばれる少しテンポアップしたパートに入り、きれいな野の花々の香りがする民衆の血から、火薬とダイナマイトの匂いがするんだ、くそつたれ！と叫ぶように締めくくる。

この「くそつたれ！」にあたるカラホ！は非常に強い言葉なのだが、人々はここを皆で力強くこの言葉を唱和する。許すまじ、忘れまじ、と。

歌とは、生きることすべてを表象することなのだ、とこの曲を聞くたびに思う。民草の声、それは一人ではけっして届かないはずの遠い場所までも、歌になることによって届くことが可能になる。その言葉とメロディによって、その魂までもが旅することができるのだ。それは、空間的なものだけでなく、時間をも越えることを可能にし、人々の生きてきた証しを遠く、私達にも伝えてくれるのだと。

「レタマの花」の時代、そしてそれに続くペルーの暴力の時代において、アンデスのワイノ歌手たちはこうした暴力の問題を歌に乗せて歌い続けた。人々の嘆きを、怯えを、悲しみを、怒りを、そして絶望を。そして、こうした暴力に、あくまで抗い続け、記憶し、忘れずに伝えていくことを、何よりも大切に歌い継いでいるのである。



レタマ：マメ科の灌木で、小さな黄色い花が咲く。地中海沿岸から南北米、オーストラリアと広く分布し、日本にも江戸時代には渡来していた(和名レダマ)

### 「レタマの花」の歌詞

皆、見に来て  
あぁ、一緒に見に行こう！  
ワクタの広場には黄色いレタマの花が咲く  
黄色い、黄色い、レタマの花

民衆の血が  
流されたまさにその場所に  
あの同じ場所に咲く黄色いレタマの花  
黄色い、黄色い、レタマの花

あそこの山陰に  
夜明けまで隠れていた  
真面目な女たちのフリをした  
お前のスカートの中に隠れていた  
お前の孫たちは子どもになる前に  
男にしなければならなかった  
あそこで！黄色い、黄色い  
レタマの花が育っている！

五ブロック先にいた  
特殊警察が突入する  
学生たちを殺しに  
心のワクタ人たちを  
黄色い、黄色い、レタマの花が  
農民たちを殺しに  
心のペルー人たちを  
黄色い、黄色い、レタマの花が

民衆の血はよい香りがする  
ジャスミンやスマイレ、  
ゼラニウムやひな菊が香りを放つ  
そして、火薬とダイナマイトの香りも  
そして、火薬とダイナマイトの、くそつたれ!!

## グリーンピースとジャガイモのオムレット

Torta de huevos con chícharos y papa

ソリサの読者の皆さんこんにちは。ふたびこの欄で一緒できてうれしく思います。

1 万年ほど前、人類は、グリーンピース (guisantes verdes) の栽培方法を覚えました。guisantes はモサラベの言葉の biššáut に由来します。chícharos と呼ばれ、モサラベの言葉 čičaro が語源です。

その他にも、abejaquilla, bisalto, arvejo, alvilla, arbeja..... などなど多くの名前を持っています。英語では green peas、フランス語では petit pois になります。

小アジア（地中海と黒海に挟まれたトルコの大半を占める半島）で約 8000 年前に栽培がはじまり、紀元前 2000 年にヨーロッパにもたらされ、スペイン人たちが 16 世紀にアメリカ大陸に持ちこみました。グリーンピースの栽培は長い歴史を持っているのです。

メキシコでも多くの地域で栽培されています。ユカタンやカンペチェ、キンタナロー、チアパスでは多くのグリーンピース料理があるため、マヤ系の人々も口にしています。

### 材料（4 人分）

- ・卵 4 個
- ・サラダ油
- ・グリーンピース缶詰 中 1
- ・玉ねぎ 小 1/2
- ・ジャガイモ 中 1
- ・塩、コショウ

### 作り方

- 1) ジャガイモを柔らかくなりすぎない程度にゆでる。皮をむいて輪切りにする。
- 2) ボウルで卵の白身と黄身をよく混ぜて、塩とコショウで味をつける。



私は日本で、この豆を使ってメキシコ料理をつくっています。

今回はグリーンピースと卵を使ったおいしくて簡単な料理です。ちなみに昔のマヤ人は卵を、chaya というユカタン原産の植物やインゲン豆とゆでたり、その他の野菜といっしょに、ブタやイノシシの脂で炒めたりして食べていました。また日本人のように生卵も食べていたようです。

- 3) 玉ねぎの皮をむいて細切りにする。
- 4) 缶詰のグリーンピースは水分を切っておく。
- 5) サラダ油（大さじ 2）をフライパンに敷く
- 6) 油が熱くなったら、玉ねぎを投入して 2 分ほど炒める。
- 7) 塩コショウで味つけした溶き卵を加えて、玉ねぎと混ぜる。
- 9) フライパンの周囲にグリーンピースを加える。
- 10) 切ったジャガイモも、卵のまわりに入れる。火を弱めて、卵が適度なカタさになるまで加熱する。
- 11) 大きな平皿に盛りつけてできあがり。

## (1) ティティカカ湖浮島観光をめぐる利権

ペルー南部プーノ付近のティティカカ湖岸の人工浮島に暮らす先住民族ウロスは元々漁業に従事していたが、今日では大半が観光業に従事している。プーノを起点とするティティカカ湖観光はマチュピチュに次ぎ年間 75 万人の訪問者がいる。しかし、この観光資源の最大の受益者はウロスの人々ではなく、ホテル、レストラン、ボートを所有する観光業者である。

プーノから 30 分の距離にある浮島観光地区ウロス・チュルニの 100 近くの浮島で、宿泊施設付きは 12、食堂設置は 6 つで、残りの浮島の住民はトトラ製民芸品や織物販売が主な収入源である。1 日当たり約 100 人の訪問者があるが、複数の島を訪問する人は皆無に近い。2 階建てトトラ観光船を仕立て、ほかの浮島との差別化で自分の島に観光客を勧誘する人もいる。

協同組合では、地区ごとの訪問日指定で浮島訪問を均等にする措置、徴収した浮島入島税の分配を試みてきたが、1 家族当たり年間 600 ドル程度に過ぎない。民芸品販売を巡る競争は同じ島に暮らす家族間でも見られる。競争を避け、遠方の島で営業を行う家族も出始めている。

また、船主や観光ガイドが観光客を下船する際にチカタ（手数料）を支払うようウロス側に要求しているため、家族経営のバス・トイレ付きの宿には半年間で 7 人しか宿泊していないといったケースもあり、経営に苦しんでいる。湖岸集落のチムー住民の中にはウロスをまねて浮島を作り、ウロス製というブランドで民芸品を販売する人もいる。ウロスの人たちは、浮島住民＝ウロスというブランド名を自分たちだけに認めるよう政府に要求している。



2階建葦船メルセデスベツ



チムー住民の開発した民芸品

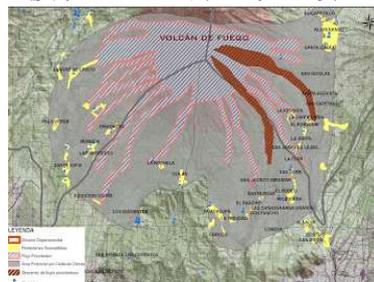
出典: <https://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-43654931>

## (2) グアテマラ「火の火山」噴火

古都アンティグアの南にある火山群の一つ「火の火山 (volcán de Fuego)」が 6 月 3 日に大噴火した。休火山の「水の火山 (volcán de Agua)」を挟んで東にあるパカヤ火山 (映画『火の山のマリア』の舞台) と、西にある「火の火山」は活発な活火山として知られる。2012、2015 年の「火の火山」の噴火で住民は避難したが死者はなかった。

今回、噴煙は上空 1.5 万 m に達し、火山灰は半径 10km の範囲に降下し、南東斜面を下り降りた火砕流の被害は甚大だった。火砕流に埋もれたエル・ロデオ村以外にもエスクイントラ県の 3 集落が廃墟となった。不明者捜索中止が宣言された 6 月 17 日段階で、死者 120 名、行方不明者 200 名以上、避難者 1.3 万人、被害額は 3 千万ドルとされていた。7 月初旬、NGO「アンティグア救助」は、政府発表は過小であり、行方不明者 (死者) は 2,600 名以上と発表した。火山活動が落ち着いた現在も、火砕流被害地区は立入り禁止とされ、不明者捜索は進展していない。

噴火当夜の記者会見で、大統領ジミー・モラレスは、「予算法のため、緊急事態に 1 センターボも拠出できない」と信じられない発言していた。「国際支援要請は災害発生 3 日後から」というマニュアルに従って、エルサルバドルの緊急救援物資満載のトラックは 6 月 7 日まで入国できなかった。政府当局の消極的対応、怠慢や不正は各所で露見している。30 万缶のイワシ缶が市価の 3 割増しで購入され、約 1,400 万円余が流用された。不正転用された緊急援助金の一部は、予算で購入できないヘリ



コプターなどの軍用装備品の購入に向けられていると指摘されている。火砕流経路 (南斜面) と降灰域 (半径 10 km)

出典: <https://desinformemonos.org/guatemala-una-nueva-tragedia-social-politica-tras-la-erupcion-del-volcan-fuego/>

### (3) アンデス南部塩湖帯のリチウム・ブーム

欧米や東アジアの自動車業界でガソリン車から電気自動車(EV)生産へシフト転換が進んでいる。搭載電池としてはリチウムイオン電池が主流である。一台当たりリチウム 20kg が必要とされる。一般的なリチウム精製法は塩湖の鹹水(リチウム 0.2%)を太陽熱で濃縮し(6%)、炭酸リチウムを精製するものである。アンデス南部高原(2,400~4,000m)にはボリビアのウユニ塩湖、アルゼンチン北西部塩湖群、チリのアタカマ塩湖などリチウムを含む塩湖が分布しリチウム・トライアングルと呼ばれる。

ウユニ塩湖の資源が有望視されるボリビアでは、2010年に韓国企業が開発権を取得していたが、政府は国内精製を打ち出し、ウユニ塩湖開発事業国有化を表明した。しかし、塩湖基底部からリチウムを鹹水として抽出するには大量の水が必要とされ、副産物マグネシウムやナトリウムの処理技術も不可欠で、ウユニ塩湖からのリチウム精製法は未確立である。

開発が最も進んでいるのはチリで、ピノチェットの義理の息子が代表を務めていたチリ化学鉱物会社、米国企業ドロックウッド・リチウム、国営のチリ産業開発公社などが1980年代から開発を進めていた。新自由主義政策を掲げるアルゼンチンのマクリ政権は積極的に海外企業の投資を求めている。EV部門急成長でリチウム需要が高まっている中国、米国FMC、日本の三菱、住友、三井物産、豊田通商、伊藤忠などが食指を動かしている。

乾燥し空気も薄い「不毛の空間」とされる地域に居住する先住民族アイマラ、ケチュア、コリャ、アタカマなどは、地下水汲み上げでオアシス型農業をできなくなる。基盤整備と引き換えに鉱山会社と協定を結んでいる共同体が多数だが、ILO169号協定に基づいた事前住民協議を求める共同体も少なからず存在している。



リチウム・トライアングルの推定埋蔵量 2300 万トン (世界の 6 割)  
ボリビア 23%  
チリ 19%  
アルゼンチン 16%

出典: <http://kaosenlared.net/americas-latina-la-fiebre-del-litio-amenaza-a-las-culturas-indigenas-de-los-desiertos-de-sal-andinos/>

### (4) 和平合意、世界遺産指定と環境破壊

7月初旬、コロンビアのカケタ・グアビアレ県にまたがるチリビケテ国立公園は、世界自然文化(複合)遺産に指定された。1989年発足時の国立公園の面積は約130万haだったが、2013年に280万ha、2018年2月には430万haまで拡張され、コロンビア最大の国立公園・自然保護区となった。2018年2月の拡張は、ユネスコ世界遺産指定を見据え、自然保護区の環境保全に積極的な姿勢を誇示しようとしたサントス政権の意向に沿ったものだった。

国立公園ではコカなどの違法植物栽培、家畜飼養、木材の違法伐採、金採掘活動などの全面的禁止が謳われていた。現実には、北西のラ・マカレナ山地国立公園に繋がる回廊である国立公園の北部地区では、牧畜業者が違法開設した道路沿いに森林破壊の波が押し寄せていた。

アマゾン保全チーム (ACT) は、国立公園一帯の森林減少の一要因として、2016年11月の和平合意成立によって FARC が国立公園一帯から撤退したことを挙げている。前年の2015年、コロンビアの森林消失面積は12万haだったが、2016年は17万ha、2017年は22万haと徐々に増加している。本来、森林消失がないはずの国立公園の森林消失面積は、2016年は10,657haだったが、2017年には12,417haとなっている。チリビケテ国立公園に隣接する3つの国立公園の場合、2016年には約3,000haだったが、2017年には約8,000haに増加した。

チリビケテ国立公園は FARC 活動地域に隣接していたため、人々は容易にアクセスはできなかった。和平合意でアクセス可能になり、60余りの岩壁窟に遺された7万点もの岩壁画の研究が進展する一方で、国立公園の生物多様性が危機に曝されていることも明白である。



ジャガー、バク、カビバラなどが描かれた岩壁画前で世界遺産指定の挨拶をするサントス大統領



熱帯雨林から抜き出るように聳えるテーブル状台地

出典: <https://es.mongabay.com/2018/06/deforestacion-ampliacion-parque-chiribiquete-colombia/>

グアテマラ、サンティアゴ・アティトラン市にある障害児（者）支援組織 ADISA については、近年レコムとしても協力関係を深めており、「そんりさ」でもグアテマラ視察報告の中で活動の様子が報告されてきました。今回、レコム総会場で新川さんより、あらためて詳しく活動状況を聞くことができました。私が ADISA を訪問したのが、13 年前（学生時代、視察同行で）のことでした。まだ小さなグループでしたので、現在までの大きな発展に、個人的にも感慨深いものがありました。いつか、日本の障害当事者組織との間で交流の道を作ることができれば……と（自分の企画力はさておき）夢見てみるこの頃です。

杉本 唯史

次回「そんりさ」印刷作業は東京で、2018 年 10 月 13 日（土）

発送作業は関西で、2018 年 10 月 20 日（土）の予定です。

参加いただける方は、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで連絡ください。

Vol. 163 グアテマラ・帰還難民のムラの 20 年	Vol. 159 グアテマラのアフリカ系
Vol. 162 エルサルバドル 昔と今	Vol. 158 コロンビア・和平の陰の暴力
Vol. 161 コロンビア革命軍の最後	Vol. 157 ニカラグア・ワスパンの今
Vol. 160 サパティスタ・芸術と科学	Vol. 156 グアテマラ戦時下性暴力裁判

#### メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

#### 会員の種類

☆会員	: 年 8,000 円	…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆学生会員	: 年 5,000 円	…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆賛助会員	: 年 10,000 円(一口)	…総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆購読会員	: 年 4,000 円	…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

#### レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15  
太田方  
TEL 075-862-2556 (留守電)  
お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは  
留守番電話にメッセージをお願いします。

ホームページ : <http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail : [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)

Facebook : <https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座 : 00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム口座 93 万 1537 円

グアテマラ基金 111 万 0672 円

(2018 年 7 月現在)

そんりさ (SONRISA) 165 号

2018 年 7 月 14 日発行

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM)

定価 400 円